『フォーラム接点』実践報告 ⑤

「社教セミナー」による『講演会による市民性の高揚活動』

小松市社会教育協会

小松市社会教育協会では、市民を対象に、社会教育セミナーとして二回の講演会を開催しました。以下にその概略等を紹介します。

◎第一回社教セミナー

日　時
六月十日（土）　午後二時～

会　場
芦城センター・多目的ホール

テーマ
ある小さな民俗学研究のこと
～舳倉島の海女の瀧回りについて～

講　師
元小松市教育長　矢原珠美子氏

講師の父沖谷忠幸氏が、昭和十年、飯田高等女学校に在任中に書かれた論文「舳倉島の海女の瀧回り」の発見に至るまでのことや、その当時の沖谷氏に関する活動、そして論文「舳倉島の海女の瀧回り」についての概要などが話された。

舳倉島の海女の昭和初期の生活に関する調査結果をまとめた貴重な論文と写真を、飯田町西勝寺住職の西山郷史氏が発見したことから始まった。発見に至ったのは、飯田高校九十周年記念誌に掲載された、沖谷氏の教え子（川端敏子氏）の回想記であった。その中に「先生とともに、奥能登の埋もれた口承伝説、民話の採集、方言や土語の蒐集、ハレの日、ケの日の習俗の採集や行事の記録などの調査に同行して歩いた」ことなどが書かれていた。このことからきっと残されている論文があるはずと、講師の矢原氏に伝えられて、探してみたところ、論文集「社会経済史学」に海士船の写真とともに掲載され残っていたとのことであった。また、インターネットで調べたら、雑誌「社会経済史学」四巻十二号（一九三五年三月十五日発刊）に掲載されていたことも判明した。

また、余談であるが、西山郷史氏は、沖谷忠幸氏が昭和四年から昭和十二年までの間寄宿された、西勝寺の当時の住職の孫であること。更に父沖谷忠幸氏についての略歴、そして柳田民俗学、折口民俗学、宮本民俗学や國學院大學郷土研究会のことや折口信夫教授との出合いなどに触れられた。

論文「舳倉島の海女の瀧回り」の概要については、以下の通りである。

第一章　「瀧回り」とその時期
・瀧回りとは
・時期　島渡り　六月十日～十四日
　離島　十月一日～三日
　自宅生活　約二十日間
　瀧回り　約四十日間

第二章　滞在地と販売圏
・輪島より東の外浦と内浦全海岸線
　陸回り　農家、漁家の納屋等を借りて自炊
　船回り　船中に起居　商品は納屋に預ける

第三章　商品について
・鰯の糠漬けが主　六千尾から一万三千尾
・農山村は糠いわし、内浦沿い町村はイカ、サザエ

第四章　販売状況
・上得意は奥地の農山村
　塩辛い糠いわしは「ヲカド」用の「ムシママ」の副食に適す
・商品取引は海産物と米の物々交換
　米一升につき　鰯二五尾、イカ3、4杯　ワカメ、ヒジキ二百匁
・販売は女性、男性は留守居をして子守その他の雑事
・十一月までにコメ十二、三俵から十五、六俵集める
・二、七の市（飯田）の販売は得意場の決まりはなく臨時収入

第五章　子弟教育・その他
・明治期設立の海士小学校の生徒は海士の子弟のみ
　夏期休業を廃し瀧回り四十日を休みとする
・大正十二年　海士小学校廃止
　海士の子弟は輪島の小学校へ四十日間学校を休ませて瀧回りに連れてくる家もあった

第六章　帰町
・「灘回り」終了後
女性は越冬の準備　薪とりなど
男性は近海漁業に従事
・「灘回り」後再び渡島してボタノリを採って越年する者もあり
三月十六日の春祭には全町民海士町へ帰って祭りを祝う

◎第二回社教セミナー

日　時
十月七日（土）午後２時～
会　場
芦城センター・多目的ホール
テーマ
那谷寺・小松天満宮の造営と棟梁山上善右衛門の作風
講　師
石川県文化財保護指導員
工学博士　田中徳英氏

講師の長年の研究を通して、加賀の生んだ名棟梁　山上善右衛門の手がけた那谷寺及び小松天満宮について学んだ。

那谷寺
　那谷寺は真言宗の寺院で本堂、三重塔、護摩堂、鐘楼、書院及び庫裏が重要文化財に指定されている。堂塔は参道の両側の切り立った山の中腹に建てられ、参道とは石段で結ばれている。そして、「奇岩遊仙境」は、観音霊場としての風景を思わせる。
　自然に溶け込んだ堂塔の拝殿、三重塔、護摩道、鐘楼は、注連縄がはられている。本殿の逗子に本尊を祀ることは寺院である。ゆえに、那谷寺では今もなお、神仏習合の文化が色濃く残ったまま、現在に至っていると考えられる。
　本殿・三重塔などの諸堂宇は、寛永十九年から開帳のあった慶安二年までの間に建てられたと推定される。那谷寺の造営で、前田利常が「建仁寺流」の名匠・山上善右衛門嘉廣を重用したことは世間に広く知られているところである。
　利常より真言宗の七堂伽藍について尋ねられ、山上嘉廣は伽藍の地取り図、家系の由緒書を提出し、那谷寺建立の指揮を仰せつけられたという（山上善右衛門略系図由帳）。嘉廣は棟梁として那谷寺の堂塔を完成させ、瑞龍寺、小松天満宮など、加賀藩の多くの枢要な造営に携わった。
　那谷寺参詣の人たち岩窟内の本殿の回りを巡りながら、「胎内くぐり」と言われる大胆な発想を取り入れた棟梁の設計に驚かされる。そして、鐘楼は正面の中央間十二枝、脇間鶴十枝、側面柱間鶴十一枝と、建仁寺流の大工技術書に合致している。このように、那谷寺諸堂宇において、嘉廣の技を今でも見られ、手に触れることができるのである。

小松天満宮
　明暦三年、前田利常は祖先神として崇拝する菅原道真を祀る小松天満宮を造営した。社殿は入り組んだ平面と変化に富む屋根の構成に、当時の権現造（日光東照宮などで採用されている）を意識している。建物は本殿、石の間、弊殿及び拝殿の構成で、権現造の平面より少し複雑である。これらの四つの平面は大きさがそれぞれ違っている。拝殿は正面に千鳥破風と軒唐破風を付けているが、権現造りの建物でも見られるとおりである。
　嘉廣は社殿・神門の作事を指揮して完成させた。小松天満宮の本殿妻飾り、拝殿千鳥破風の虹梁大瓶束式における緩やかな虹梁の曲線や大瓶束の結綿、木鼻の上巻の渦などに、建仁寺流の特徴が見て取れる。
　また、小松天満宮社殿の細部意匠は、和様を主体に、禅宗様の様式も加えている。すなわち、嘉廣はこの作事で神社建築らしい和様の様式にも技をよく発揮している。なお、寛政二年の西町山王権現祭礼曳山舞台棟札によれば、建仁寺流の技法は小松の大工にも浸透していたことがわかる。
　参考
山上善右衛門の手がけた作品（建築物）を列記すると以下の通りである。
寛永十九年　那谷寺本堂
（本殿・唐門・拝殿）
三重の塔
護摩堂　鐘楼
正保　四年　護国八幡宮拝殿
慶安　四年　日石寺本堂
承応　三年　気多神社拝殿
明暦　頃　瑞龍寺法堂
明暦　三年　小松天満宮社殿・神門
万治　二年　瑞龍寺仏殿
これらの中で、那谷寺、小松天満宮は「小松の宝」と言えるものである。
注釈
和様と禅宗様
　和様とは鎌倉時代に伝えられた禅宗様の建築に対して、仏教伝来とともに伝えられた中国建築の様式を基に、日本化した様式をいう。また、禅宗様とは、鎌倉時代、禅宗とともに導入された宋の建築様式をいう。和様とともに寺院建築の二支流の一つとなった。唐様ともいう。（報告担当　清丸亮一）